

2章 2015年度COC事業による「教育」

コラボ教育

継続看護・訪問看護教育

大学院 CNS コース

コラボ教育

～コラボ教育とは？～

住民の方との「コラボレーション（協働作業）」による教育として、平成 21 年度より、地域住民の方が「教育ボランティア」として、概論・演習科目において模擬患者や経験談を語っていただく講義を開講している。本 COC 事業では、卒業生全員が「地域住民の暮らしを理解する」ために、より住民の暮らしに近い場所で、住民に参加いただく授業を平成 26 年度より須磨区北部において開講している。

<1 年生科目>

ヘルスプロモーション論（必修・1 単位）

- ◆ 教育内容：「あなたの脳は健康ですか？」のテーマで、生き活きとした脳の働きを保つための生活習慣について、研究データをもとに講演し、学生と一緒に脳にとってよい体操を行なう。
- ◆ 履修者数 97 人（編入 3 年生 6 人）
- ◆ 演習日時：2015 年 11 月 25 日（水）午後 1 時 20 分～2 時 10 分
- ◆ 演習場所：須磨パティオホール
- ◆ 住民参加数：14 人（男性 3 人、女性 11 人、65 歳以上 11 人）
- ◆ 学習の課題：「より多くの市民に参加していただくにはどうすればよいか。アイディアの提案」についてレポートする。
- ◆ 参加住民の感想

「認知症の話は何度もお聞きしていますが、何度聞いても忘れてたりしていますし、新しく分かったことがあったりしますので、今後も続けてほしいです。」

「わかりやすく楽しい講演でした。ありがとうございました。学生さん、もっとさっと前に出てください。」

- ◆ 担当教員から

レポート課題に取り組むことで、学生たちと市民とが「共に学び、共に創る」とはどのようなことなのかのイメージが、具体像を結びつつあるように感じられた。そこで以下に、学生のアイディアをいくつか紹介してみたい。

まず、市民にもっとわかりやすく情報を提供することが大事であるという意見が多かった。今回は、地域の中での宣伝があまり活発にできてなかったことは、来場者を減らす大きな原因だと言える。市民参加の意義について広く市民に理解されるよう、また市民参加への意欲を高めるためにも、広報活動にもっと努めるべきであろう。

次に、関心ある市民を積極的に受け入れ、講義の製作段階からその市民の方々の意見・意思をきめ細やかに反映させていくという意見があった。確かに、いきなり大きな講義をするのではなく、少人数の地域の集まりからスタートし、そこでまず直接市民の方の意見をきき、それに基づいて、講義の内容や宣伝の仕方を考え実践すると、市民の方の意見も取り入れられ、より参加しやすい講義になるであろう。市民がこのような講義、



～学生がステージ上でモデルとなって、脳によい体操を実施～

すなわち地域のイベントに参加することは、市全体の利益、自分自身の利益を視野に入れ、自分の健康と未来に責任を十分に持って、自主的かつ主体的に、また市民同士が協力しあって自分たちの健康について考え、行動することにつながると考えられる。なお、市民参加の制度は、特定の市民ばかりが参加することにならないよう配慮する。講義よりも前の段階で、参加意識を高めるためのセミナーなどを開催して、参加する市民の視野を広げるという意見もあった。総じて、1回ではあるが、市民とのコラボ教育の成果が垣間見られるレポートが多かった。

(専門基礎科学領域健康科学分野・准教授 加藤憲司)

基礎看護技術演習Ⅰ（必修・1単位）

- ◆ 教育内容：「睡眠を見直そう」をテーマに、人にとっての睡眠の意義や生体リズムについての講義を50分行った後、毎日の過ごし方やよく眠るための工夫などについて学生と住民さんと意見交換を行う。
- ◆ 履修者数：91人
- ◆ 演習日時：2015年10月14日（水）午前10時～12時
- ◆ 演習場所：須磨パティオホール
- ◆ 住民参加数：15人
(男性3人、女性11人、65歳以上 12人)
- ◆ 学習の課題
 1. 事前課題「就寝前、起床時の体温を測定して記録する。1日の生活行動を記録する」
 2. 事後課題「自己の生活リズムと睡眠について、考察する。」
- ◆ オプション企画：事前に活動量計を2週間装着し、活動および睡眠分析の結果を個別にフィードバックした。
- ◆ 住民からの評価（アンケート回収率93.3%）
 - <講義>とても有益だった：57.1%、まあまあ有益だった 42.9%
 - <グループワーク>とても有益だった：78.6%、まあまあ有益だった：21.5%
- ◆ 学生からの評価（アンケート回収率100%）
 - <講義>とてもわかりやすかった：80.2%、まあまあわかりやすかった：16.5%
 - <グループワーク>とても有益だった：84.6%、まあまあ有益だった：13.2%
- ◆ 担当教員から



～学生・住民混合による
グループワーク～

本授業科目は1年生が初めに履修する技術演習科目で、「看護行為に共通する技術および健康的な日常生活行動を促進する基礎的な援助技術について、その知識と方法を習得する」ことをねらいとしている。「休息・睡眠を促す援助」の単元である本企画は、生体リズムに関する基礎的な知識を得て、ひとの健康生活の柱のひとつである「休養」の意義を理解し、異なる世代との交流を通して各々の生活リズムの特徴を知り、課題や工夫について共に考えることを目標に実施した。

グループワークは、住民さん1名と学生6～7名のグループを作り、学生の進行で行

った。学習方法としてのグループワーク経験が少ないうえ、世代の異なる人とのコミュニケーションの機会が少ない学生達ではあるが、住民さんの協力により活発な情報交換がなされていた。学生は、多くの住民さんの生活リズムが規則的で、目的的な活動を生活の柱にしなが、社会活動を継続して日々充実した生活を送っていることを知り、自分たちとの違いに驚くと共に貴重な経験ができたと感じていた。また、その人の生活を理解することがひとを理解するために重要であることを実感し、同時に自分の生活を見直したいとふりかえる学生も多かった。住民さんからは以下のような感想をいただき、参加者双方に有意義な企画であったと考える。

- ・睡眠についてこんなに深く考えた事はありませんでしたが、詳しく教えていただきありがとうございました。
- ・今後メラトニンがよく出ることを考えて、もっと工夫は必要だと思いました。
- ・学生さんの生活リズムを知ることができ、楽しい時間でした。 (以上、抜粋)

オプション企画は、昨年度の反省をふまえてプログラム当日に個別の結果を提示できるよう計画し、直接、結果の見方を説明することができた。次年度は、この企画の評価もアンケートに含められるよう工夫したい。

(基盤看護学領域基礎看護学分野・准教授 柴田しおり)

<2年生科目>

基礎看護技術演習Ⅲ (必修・2単位)

- ◆ 教育内容：域住民にヘルスインタビューと健康測定(「呼吸・循環器系」「栄養代謝系」「筋骨格系」のいずれか)を実施し、対象者の生活や健康状態とその関連を考察する。
- ◆ 履修者数：94人
- ◆ 演習日：2015年6月2日～7月28日 計10回(学生8～10人/回)
- ◆ 演習場所：須磨区竜が台地域福祉センター(6回)、菅の台地域福祉センター(4回)
- ◆ 住民参加数：のべ282人(実人数120人)
- ◆ 学習の課題：健康測定・インタビューに関する記録用紙(観察した事実や情報収集した事実の記載、整理ができる)、レポート「地域住民の生活と健康状態との関連を考察する」(日常生活やその工夫、生活環境や健康状態について記述できる。対象者の生活像や対象者が抱えている健康に対する考えについて記述できる。)
- ◆ 課題の評価：「良く達成できた」50%、「達成できた」11.7%、「まあまあ達成できた」35.1%、「あまり達成できなかった」3.1%
- ◆ 参加住民の感想(一部抜粋)



～健康測定を行う学生～

<自分の健康状態がわかってよかった。健康の意識付けになった>

- ・健康な方なので医者へ行く機会が少ないため、参加できよかった。
- ・参加することによって、自分の健康に気をつけるようになる。

<継続の大切さがわかった>

- ・去年も参加して、少しずつ身体の変化がわかりよかった。

<学生のがんばる姿に触れてよかった>

- ・若い方々の学びへの姿勢に触れてうれしくなった。
- ・一生懸命な態度に良い印象をもった。立派な看護師になられることだと思う。

<世代間交流ができてよかった>

- ・世代の違う学生と話をするとエネルギーをもらい、与え、楽しい。
- ・若い人の話が聴けてよかった。まだまだ働けると思った。

◆ 学生の感想（一部抜粋）

<「伝える」ことの難しさに気づいた>

- ・自分の説明が曖昧だと相手に伝わらないことを実感した。
- ・自信がなくて語尾が弱くなると、こちらの不安が伝わってしまうと感じた。

<知識の必要性を実感した、看護師としての意識をもった>

- ・住民の方は看護大学の学生に専門的な知識を求めておられた。「まだ学生だから」などと思ってはいけないし、数値や知識の一つひとつに責任を感じた。

<「聴く」姿勢・視点が信頼関係につながる>

- ・自分の価値観を押しつけるのではなく、一歩引いて、まずは相手の様子をみながら耳を傾けて聴く姿勢が大切だと感じた。これからは話の聴ける看護師を目指したい。

<加齢や疾病についての認識が変わった>

- ・高齢者は社会的に弱い立場だと思っていたが、長い人生の中から話す内容と言葉は一つひとつ重みがあり貴重だった。高齢者は尊敬する方たちだと感じた。
- ・病気はななくす（治す）ものだと思っていたが、住民の方が自分の病気やからだの変化に向き合いながらしっかり受け入れて、自主的に健康管理をしていることを知った。病気による不自由さも含めその人の生活が成り立つように支援することも看護の役割だと思った。

<住民の健康意識の高さや交流、コミュニティの大切さを知った>

- ・参加者の健康意識の高さと元気をみて、地域活動への参加の効果は大きいと感じた。

<「生活者という視点」「人生背景や価値観」「コミュニティの力」について学んだ>

- ・実際に顔をあわせて高齢者の方と話したことは楽しく貴重な経験になった。一つひとつが自分たちの知らない時代の話であり、その背景によってさまざまな価値観があることがわかった。

◆ 担当教員から

今回の演習は、学生にとっては学外で地域住民の方にインタビューや測定を行う初めての機会であった。ヘルスインタビューは、地域住民の生活や健康状態について知ることを目標として、住民1名に対して学生2名で実施させていただいた。学生は、短い時間の中で話が聞けるように、質問内容や話の聞き方を考えて臨んだが、実際には一方的な質問になったり、話を深く掘り下げて聞けなかったり、対象者の話を聴くことの難しさを実感していた。しかし、生活に焦点をあててインタビューすることで、住民の方が健康に留意しながら生活を工夫されていること、自分たちがイメージしていたよりも高齢者が生き生きと生活しており、健康への関心が高いこと等を知る機会になっていた。

健康測定に関しては、測定ブースに来られた方に対して、学生が交代で測定を実施した。学内演習で学んだばかりの血圧測定や計測項目であったこと、自分達とは違う年代

の方であったことから、緊張している様子も見られ、測定に時間がかかることもあった。しかし、住民の方が学生を温かく見守り、わからないことは質問して下さることで、丁寧に対応することができていた。学内演習では、学生同士で測定の練習を行うため、今回の演習では計測値の幅の広さを実感することができた。また、住民の方に、測定に関する説明や測定結果をわかりやすく伝えるにはどのようにするとよいのかを考えながら実施することができていた。さらに、待機ブースで健康に関するチェックリストを記入している住民の方にも積極的にかわり、高齢者の生活や考え方に触れる機会になっていた。

(基盤看護学領域基礎看護学分野・講師 玉田雅美)

(地域連携教育・研究センター・助教 石井久仁子)

健康生活支援学実習（必修・2単位）

- ◆ 教育内容：地域で生活する日と人々の中で人と関わる力を養い、人々の生活と生活の場である地域を理解し、その人にとっての「健康」とは何かを考える。また人々が健康を維持・増進するための支援のあり方を考察することを目的とする。
- ◆ 履修者数：100人（10人が1グループとなり、10グループを形成）
- ◆ 実習期間：2016年2月15日（月）～2月26日（金）
- ◆ 実習実施場所：神戸市西区9小学校区（伊川谷、井吹台、西神西、長坂、桜ヶ丘、押部谷西、押部谷東、平野、神出）、須磨区2小学校区（竜が台、菅の台）
- ◆ 教育ボランティア数（ご協力いただいた方）：95人
- ◆ 実習の具体的内容：グループ内で、2～3人1組となり、そこに居住する教育ボランティアに登録された方の訪問し、「暮らし」「健康」に関するインタビューを行なう。人々の生活と地域の特徴、健康の維持・増進との関連について考察を深めるために地域の探索を行なう。
- ◆ 学びのまとめ（合同カンファレンス資料より一部抜粋）
 - ・「対象者にとっての健康の意味とは？」といった疑問をもって関わる。
 - ・今ある資源をさらに活用できるような支援。
 - ・その人らしい生活を支える。
 - ・看護職者が民生委員との連携を強化していく。
 - ・地域の人意識に働きかける支援を考える。
 - ・その人らしさを大切にし、見守りするだけに留めておくことも時には必要。
 - ・同じ地域でも地区ごとに特徴がある。そこを踏まえて、活かして支援する。
 - ・100人いたら100通りの健康観がある。
 - ・その人の持っている力を引き出し、大切にしていることを尊重すること。

<3年生科目>

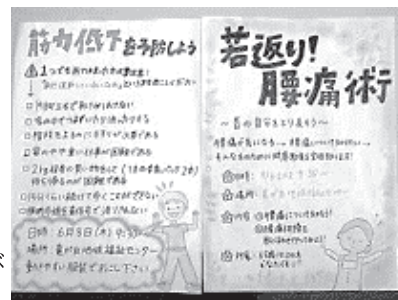
健康学習論（選択／保健師必修・1単位）

- ◆ 教育内容：公衆衛生看護で対象となるあらゆる世代や、特定集団の特性に応じた健康教育・健康学習の企画・実施・評価の一連の過程を学習する。
- ◆ 履修者数：86人（うち18人が須磨区で演習を行なった）

- ◆ 演習日時：2015年6月3日（水）午前9時30分～11時
- ◆ 演習場所：須磨区竜が台地域福祉センター
- ◆ 住民参加数：11人
- ◆ 学生の企画した健康教育テーマ：

「筋力低下を予防しよう」「若返り腰痛術」

- ◆ 学習の課題：「作成にあたって工夫した点」
「講評を踏まえた改善点の検討」「演習で得られた学びと実習に向けての抱負」についてレポートする。



～学生が作成したチラシ～

- ◆ 参加住民の感想

「センターの掲示を見てきた。手書きの掲示なので目立った。」

「歌に合わせて体操するのがよかった。」

「もう少し自信をもって話をされるとよい。」

- ◆ 学生の感想

「参加対象者の特性に合わせた対応をすればよかった。」

「健康寿命のことなど、住民さんが結構知っていた。」

「手書きのチラシの効果や体操を続けていくという声があり、実施による目標が達成できた。」

- ◆ 担当教員から

本科目は昨年度に開講されたものだが、昨年度の演習は学内において、あらゆる世代の住民を対象とした健康教育を企画、実施する内容であった。今年度から、履修者の一部が実際に須磨区の地域福祉センターで、住民の方を対象としての健康教育を実施することになった。高齢化率の高い地域という特性から、高齢者を対象とした健康教育を企画する内容である。学生にとっては、学内での演習よりも、より実際に近い環境での健康教育の実施を経験する機会となった。86名の履修者のうち、2グループ16人の学生が、須磨区において実施した。

当日はあいにくの小雨で、時間ぎりぎりまで住民の方が来てくれるかという不安もあったが、住民の方には「手書きのチラシが、普段貼ってあるチラシと違って目を引いた。何かと興味を持った」という言葉をいただくことができた。筋力低下と腰痛対策の2つのテーマで、自作した教育媒体をもとに説明、また音楽などに合わせての体操を実演した。参加した住民の方からは、「体操を続けたい」という意見もいただいた。一方で学生たちは、緊張のためか、体操の場面では住民の傍で動きを丁寧に教えることができず、立ち位置や声の大きさなどの課題も残った。健康指導を行なう際の声の大きさ、話す速度などは、世代によって異なること、配慮しなければならない点など、この演習を通じて学んでいってほしい。

(地域連携教育・研究センター・准教授 相原洋子)

<4年生科目>

健康行動論（選択／保健師必修・1単位）

- ◆ 教育内容：生活習慣や健康維持に関するインタビューを行い、内容を健康行動理論を用いて健康行動の分析を行う。

- ◆ 履修者数：22 人
- ◆ 演習日時：2015 年 5 月 7 日（木）午後 1 時 30 分～3 時
- ◆ 演習場所：北須磨文化センター
- ◆ 住民参加数：7 人
- ◆ 参加住民の感想（一部抜粋）

「少し気になっていたが、聞く場所がなかったことを聞くことができた。」

「学生が一生懸命話を聞いてくれた。役に立てたのならよかった。」

「みんな気持ちよく対応してくれた。塩分の摂りすぎに注意する。」



～グループ インタビューの様子～

- ◆ 学生の感想（一部抜粋）

「病院とは違い事前情報もないまま、健康に関するインタビューをする難しさを知った。」
 「健康問題が明確でない地域住民の方に、健康維持のための援助とは何かを深く考えさせられた。」

「その人が持っている歴史、生活背景、価値観がある中で、理論を用いて対象者の生活習慣を改善していくことが難しかった。」

- ◆ 演習に参加した教員の感想

本科目は特に保健師を目指す学生が、保健指導を行なう際に必要となる技術を学ぶため、3～4 人 1 組となり生活習慣に関するインタビューを行ない、インタビュー内容を健康行動の理論を用いて分析する内容である。本年度より新たに開講した科目である。「健康に過ごすために、どんな行動をとればよいか知りたい」「生活習慣を見直したい」と思われる方を、須磨区において募集した。参加いただいた住民の方は当初、「どのようなインタビューをされるのか、わからない」「難しいことを聞かれるのかな」という不安や戸惑いを口にされていた。また学生においても、基本情報、健康に関する情報など全く知らない初対面の方に、生活習慣に関するインタビューを行なうことに、これまでの病院実習とは異なる難しさを感じたようであった。中には非常に健康に暮らしている方もおられ、そのような方にどのような支援を考えるべきか、苦慮したという感想もあった。限られた時間だったが、学生は住民の方の生活を把握しようと傾聴の姿勢をもっており、その姿勢に参加いただいた住民の方も、当初の戸惑いを払拭いただいたようであった。また 2 年生のコラボ教育にご協力いただいている住民の方からは、「さすが 4 年生だけあって、話の流れをしっかりとつかんでくれていた」という意見をいただき、学生の成長を感じていただいた演習であった。

（地域連携教育・研究センター・准教授 相原洋子）

継続看護・訪問看護教育

神戸市における地域ケアシステム、在宅医療の連携システムの中で継続看護および訪問看護の実践者としての役割を果たせる人材の育成を目指して、本年度は4科目の概論・演習科目において実践者を招聘し、講義を行った。

実践者による講義科目と内容

科目名(単位)	対象学年	開講日	講師(所属)	講義内容
慢性病看護学概論 (1単位)	2年生	6月25日	藤田愛氏 (北須磨訪問看護ステーション所長・慢性病看護学専門看護師)	「糖尿病と下肢動脈閉塞を抱えながら療養生活をおくる高齢ご夫婦を支える訪問看護」
在宅看護概論 (1単位)	2年生	1月28日	原田三奈子氏 (訪問看護ステーションすまあと北支所管理者・訪問看護認定看護師)	「訪問看護ステーションにおける運営管理について」
在宅看護論 (1単位)	3年生	6月22日	山野薫氏 (宝塚医療大学保健医療学部理学療法学会 教授)	「在宅療養者の看護：リハビリテーション看護」看護師によるリハビリテーションの基礎知識と専門職間の連携・協働について考える
がん看護と緩和ケア (1単位)	3年生	7月20日	梅田節子氏 (神戸市立医療センター中央市民病院・がん看護専門看護師)	<ul style="list-style-type: none"> ・緩和ケア外来看護師の立場から「通院中のがん患者および家族の継続支援」 ・緩和ケアチーム専従看護師の立場から「チーム医療と在宅移行支援」

継続看護実習評価(中間報告)

継続看護実習は、コラボ教育や継続看護についての講義を基盤にして、市民病院群や他の病院施設、保健センター、訪問看護ステーションなどの協力を得て実施している。COC事業では下記の継続看護教育目標と実習における共通目標を掲げ、科目実習での継続看護視点の強化を図っている。また、今年度は総合実習後に合同カンファレンスを実施し、各分野での「継続看護」「他職種との連携」の現状と支援について理解を深め、看護職の役割について意見交換を行った。

●COC 事業における継続看護教育目標

1. 地域における施設医療から在宅ケアまでの流れ（高度医療施設から一般病院へ、さらには在宅へ）を理解できる。
2. 退院から地域における生活の継続を考え、入院中に立てた退院後のケアプランが患者の地域での暮らしに合った内容や方法だったかどうかについて評価することができる。
3. 地域の人々の普段の生活や入院患者の退院後の生活を想像でき、施設内の看護ケアに留まらず、退院後の生活者の視点から退院計画を立てることができる。

●実習の共通目標

1. 地域における施設医療から在宅ケアまでの流れについて、システムや制度、継続的看護実践について理解できる。
2. 生活をイメージした退院時のケアを実践できる。
3. 他職種の役割や地域資源の活用について理解できる。

●各領域における体験項目

各科目において、継続看護の視点を養うための体験ができるようにしている。下記に一例を掲載する。

- ・地域連携推進室などの見学。
- ・退院指導、退院支援、退院前カンファレンスへの参加、サービス担当者会議等への参加。
- ・外来見学により、患者に対する継続的な看護を行なうためのシステムや方法を理解する。
- ・外出、受診、入所予定者の事前訪問への同行。
- ・地域活動支援センター、就労支援センター、グループホーム等の見学

●総合実習後の合同カンファレンスの開催

異なる分野で実習をした学生が小グループになり、総合実習での学びや経験を共有し、各分野での「継続看護」「他職種との連携」の現状と支援について理解を深め、看護職の役割について意見交換を行った。

●継続看護実習目標の達成度

平成 27 年 12 月末現在では、基礎看護実習は終了し、科目実習は 45.8%が終了（継続中）している。継続看護教育目標は「十分達成した」34.8%、「達成した」56.1%、「一部達成した」8.9%、「達成していない」0.2%である。

●継続看護に関する体験目標項目と達成度

・基礎看護学実習

体験目標項目	対象学生の体験率
地域連携推進室などの見学	37.5%
退院カンファレンスへの参加（受け持ち以外含む）	24.0%

・地域・在宅・訪問看護学実習

体験目標項目	対象学生の体験（率）
保健センターにおける健康相談事業の体験	1名あたり1回（100.0%）
地域包括支援センターにおける同行訪問人数	延べ10人（22.2%）
訪問看護ステーションにおける訪問件数	1名あたり10.6件（100.0%）
サービス担当者会議参加人数	延べ24人（53.3%）
退院前カンファレンス参加人数	延べ4人（8.8%）

・老年看護学実習

体験目標項目	対象学生の体験率
サービス担当者会議等への参加	50.0%
外出、受診、入所予定者の事前訪問への同行	0.0%

・精神看護学実習

体験目標項目	対象学生の体験率
受け持ち患者が参加するプログラムでの地域活動支援センター、就労支援センター、グループホーム等の見学、および、利用者との交流会の参加、多職種での退院支援会議、退院前訪問看護師とのケア会議等への参加、学生カンファレンスでの共有。	100.0%

・慢性看護学実習

体験目標項目	対象学生の体験率
受け持ち患者の退院指導、退院支援を行う	95.6%
受け持ち患者の多職種による退院前カンファレンスに参加する	6.7%
受け持ち患者以外でも地域連携室が関わる退院支援の場面に参加する	28.9%

・周手術期・クリティカルケア看護学実習

体験目標項目	対象学生の体験率
転院・退院に向け、地域医療推進室が手術後の患者を支援する場面を見学する（見学できない学生はカンファレンスで共有）。	12.7%

・小児看護学実習

体験目標項目	対象学生の体験率
受け持ちの子どもに対して退院支援を行う。	100.0%
1日の外来見学実習	100.0%

（地域連携教育・研究センター・助教 石井久仁子）

大学院教育

コラボレーション看護論

- ◆ 履修者：大学院博士前期課程 1、2 年生 15 人
- ◆ 実施内容：チーム医療に関する考え方を学び、医療機関内の連携だけでなく、医療機関の間での連携や医療機関と地域との連携を推進していくために必要な看護師の役割や看護管理のあり方、連携能力の育成に関わる看護教育について、エキスパートからの講義を受講し、討議・考察する。

<実践者からの講義>

- ①「緩和ケアチームの活動」 梅田節子看護師
(神戸市立医療センター中央市民病院 緩和ケアチーム専従、がん看護専門看護師)
- ②「NST チーム (栄養サポートチーム) の活動について」 北川恵看護師
(西神戸医療センター NST 専門療法士)
- ③「せん妄ケアチーム活動を通してコラボレーションを考える」 伊藤聡子看護師
(神戸市立医療センター中央市民病院 急性・重症患者看護専門看護師)
- ④「シームレスな医療・看護を提供するための地域連携のあり方」 宇野さつき看護師
(新国内科医院 看護師長)
- ⑤「看看連携を推進するためのネットワークづくり」 三輪恭子看護師
(よどきり医療と介護のまちづくり株式会社 地域看護専門看護師)

精神看護学特講演習 I

- ◆ 履修者数：精神看護学 CNS コース 1 人
- ◆ 実施概要：「こころと身体の看護相談」への参加
- ◆ 開講期間：2015 年 12 月～2016 年 12 月
- ◆ 実施回数：12 回 (現在までに 3 回)
- ◆ 実施場所：ユニティ
- ◆ 教育内容：

大学院生 1 名が教員の指導のもとでクライアントの相談にあたった。「こころと身体の看護相談」は、月 1 回のペースで年間を通じて開催しており、大学院生は、平成 27 年 12 月から約 1 年間にわたり演習を行う予定である。担当するクライアントは、様々な心の悩みや生活上の困難を抱えている当事者とその家族であり、地域に根差した開かれた相談の場としての機能を果たしていると考えられる。今年度は、平成 28 年 2 月現在までで、実人数 4 名のクライアントに対して、延べ 6 件の相談にあたり、内 1 名は継続して相談を行っている。相談面接後、大学院生は振り返りを行い、教員のスーパーバイズを受けて次回継続相談につなげている。

- ◆ 大学院生からの評価：

どんなクライアントの方々が来られるのか、様々な背景がある中で精神状態のアセスメントをしながら相談に乗るのはとても難しく、また自分の不足する部分にも直面することが多かったのですが、とても貴重な体験をさせて頂く機会となりました。この体験を今後のコンサルタント活動、直接ケアに生かしていきたいと思います。